

春が来た

作詞 高野辰之
作曲 岡野貞一

春が来た 春が来た どこに来た。
山に来た 里に来た、
野にも来た。

花がさく 花がさく どこにさく。
山にさく 里にさく、
野にもさく。

鳥がなく 鳥がなく どこでなく。
山で鳴く 里で鳴く、
野でも鳴く。

※明治43年7月発行の「尋常小学読本唱歌」に掲載されました。

朧 おぼろ) 月夜

2 1

作詞 高野辰之
作曲 岡野貞一

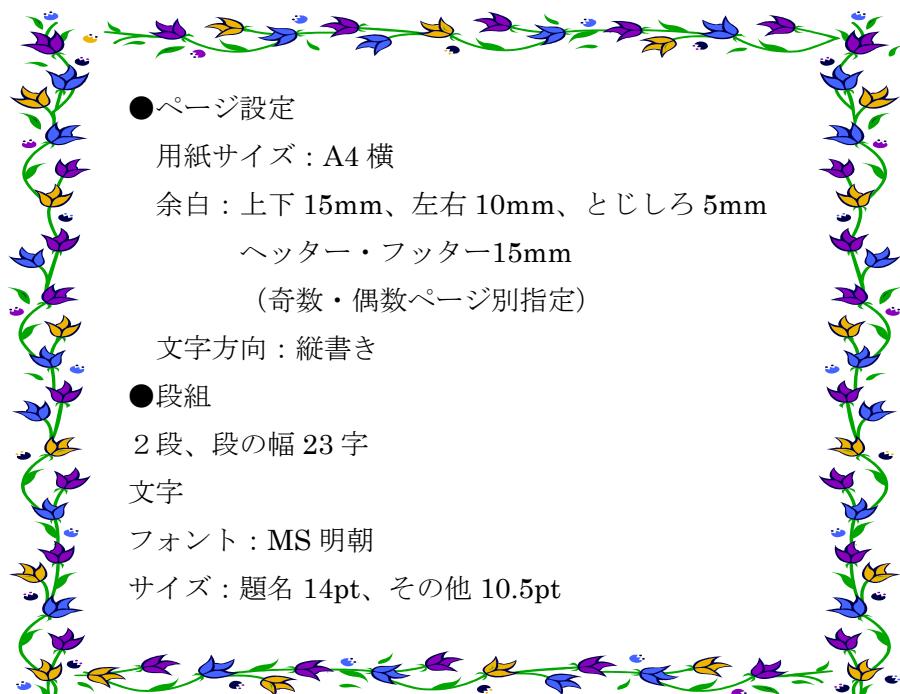
菜の花畠に入日薄れ、
見わたす山の端霞ふかし。
春風そよふく空を見れば、
夕月かかりて におい淡し。

里わの火影も、森の色も、
田中の小路をたどる人も、
蛙のなくねも、かねの音も、
さながら霞める 朧月夜。



クリップアート：「月」で検索

※岡野、高野両氏は、東京音楽学校(現在の芸大)の教授だったそうで、このコンビは「春が来た」「春の小川」「故郷」「紅葉」など、数々の名作を残しています。



●ページ設定

用紙サイズ：A4 横

余白：上下 15mm、左右 10mm、とじしろ 5mm

ヘッター・フッター 15mm

(奇数・偶数ページ別指定)

文字方向：縦書き

●段組

2段、段の幅 23字

文字

フォント：MS 明朝

サイズ：題名 14pt、その他 10.5pt

仲よしこみち

作詞 三苦 やすし
作曲 河村 光陽

仲よし小道の 日ぐれには
母さまお家で お呼びです
さよならさよなら また明日
お手手をふりふり さようなら

仲よし小道は どこの道
いつも学校へみよちやんと
ランドセル背負(しょ)って 元気よく
お歌をうたつて 通う道

仲よし小道は うれしいな
いつもとなりのみよちやんが
にこにこあそびにかけてくる
なんなんの花句う道

仲よし小道の 小川には
とんとん板橋 かけてある
仲よく並んで 腰かけて
お話するのよ たのしいな

4 3

鯉のぼり

作詞 不詳
作曲 不詳

※こいのぼりの歌は、皆様ご存じの通り2つあります。やねよりたかい「こいのぼり」が「こいのぼり」で、甍の波と雲の波…」が「鯉のぼり」です。「こいのぼり」は昭和6年、「鯉のぼり」は大正2年に作られています。

甍の波と雲の波、
重なる波の中空を、
橋かおる朝風に、
高く泳ぐや、鯉のぼり

開ける広き其の口に、
舟をも呑まん様見えて、
ゆたかに振う尾鰭には、
物に動ぜぬ姿あり。

百瀬の滝を登りなば、
忽ち竜になりぬべき、
わが身に似よや男子(おのこじり)と、
空に躍るや鯉のぼり。



クリップアート：「carp」で検索



クリップアート：「road」で検索

※河村光陽さんは「赤い帽子白い帽子」「うれしいひなまつり」「かもめの水兵さん」「ゲッズバイ」「船頭さん」「早起き時計」「サンゴのひとりごと」など、数多くの童謡を残しています。

茶摘み

作詞 不詳
作曲 不詳

夏も近づく八十八夜、
野にも山にも若葉が茂る。

あれに見えるは茶摘じやないか。
あかねだすきに菅の笠。「

日和つづきの今日此頃を、
心のどかに摘みつつ歌う。

摘めよ摘め摘め摘まねばならぬ。
摘まにや日本の茶にならぬ。」

※文部省唱歌「茶摘」は、明治45年の尋常小学唱歌(三)」で発表されました。

6 5

夏は来ぬ

作詞 佐佐木 信綱
作曲 小山 作之助

うの花のにおう垣根に、時鳥(ほととぎす)
早もきなきて、忍音もらず 夏は来ぬ

さみだれのそそぐ山田に、早乙女が

裳裾(もすそ)ぬらして、玉苗ううる 夏は来ぬ

橘のかおるのきばの窓近く

蛍とびかい、おたり諫むる 夏は来ぬ

棟(あうち)ちる川べの宿の門遠く、

水鶴(くいな)声して、夕月すずしき 夏は来ぬ

さつきやみ、蛍とびかい、水鶴なき、

卯の花さきて、早苗うえわたす 夏は来ぬ



クリップアート：「summer」で検索



クリップアート：「tea」で検索

※作曲の小山先生は、文部省音楽取調掛第二回卒業生で、東京音楽学校で教鞭をとつておられたそうです。敵は幾万」は有名ですね。高校野球で、作詞の佐佐木先生は、軍歌もたくさん書いておられます。「勇敢なる水兵」とかですね。

かたつむり

作詞 不詳
作曲 不詳

でんでん虫々 かたつむり、
お前のめだまは どこにある。
角だせ槍だせ めだませ。
角だせ槍だせ あたまだせ。

でんでん虫々 かたつむり、
お前のめだまは どこにある。
角だせ槍だせ めだませ。

※明治44年5月発行の『尋常小学唱歌(一)』に掲載されました

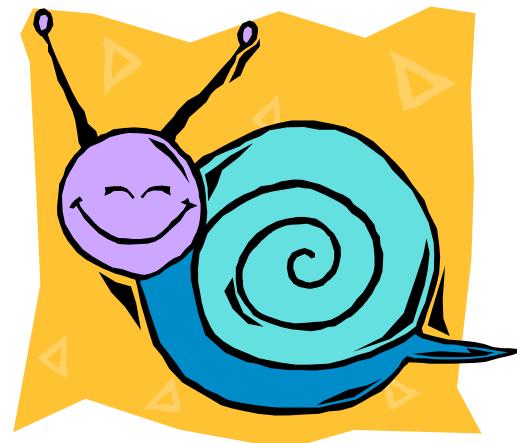
海 8 7

作詞 不詳
作曲 不詳

です。大正2年5月発行の『尋常小学唱歌(五)』に掲載されました。



クリップアート：「sea」で検索



クリップアート：「かたつむり」で検索

松原 遠く 消ゆるところ
白帆のかげは 浮かぶ
ほしあみ浜に 高くして
かもめは 低く 波にとぶ
見よ昼の海 見よ昼の海
島山 やみに しるきあたり
いさり火 光 あわし
よる波 岸に ゆるくして
うら風 かろく いさご吹く
見よ夜の海 見よ夜の海

※同じ文部省唱歌ですが、「テみはひろいな おおき
いな…」というのが「テみ」で、「松原遠く 消ゆる
ところ…」というのが「海」です。で、これは「海」

揺籃のうた

作詞 北原白秋
作曲 草川信

ゆりかごの歌を
かなりやがうたうよ
ねんねこねんねこねんねこよ

ゆりかごの歌を
かなりやがうたうよ
ねんねこねんねこねんねこよ

ゆりかごの上に
ゆりかごの実がゆれるよ
ねんねこねんねこねんねこよ

※この場合、「揺籃」は「ようらん」ではなく、「ゆりかご」と読みます。要するに「ゆりかごのうた」ですね。詞は北原白秋さんで、大正10年8月の「小学女生」に発表されました。曲がついたのは翌11年の6月ごろだそうです。

ゆりかごのつなを
木ねずみがゆするよ
ねんねこねんねこねんねこよ

ゆりかごの夢に
黄色い月がかかるよ
ねんねこねんねこねんねこよ



クリップアート：
「ベビーベッド」で検索

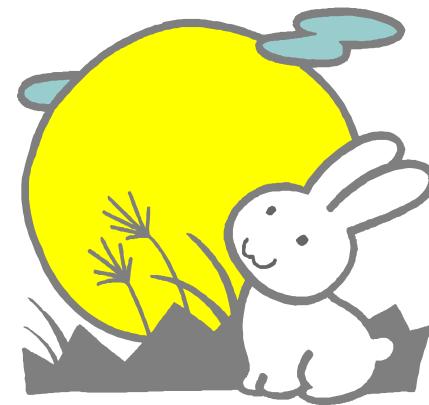
10 9

十五夜お月さん

作詞 野口雨情
作曲 本居長世

十五夜お月さん
御機嫌さん

婆やはお暇(いとま)とりました



クリップアート：「満月」で検索

※ばあやを雇つていたくらいだから、裕福な家庭だったのです。でも、ばあやはお暇をとりました。もういません。妹は田舎にもらわれていきました。

十五夜お月さん
母(かか)さんに
も一度わたしは逢いたいな。
妹は
田舎へ貰(もら)れてゆきました

牧場の朝

作詞 杉村楚人冠
作曲 船橋栄吉

遠い野末に、牧童の
笛が鳴る鳴る、ぴいぴいと。

ただ一面に立ちこめた
牧場の朝の霧の海。
ポプラ並木のうつすりと
黒い底から、勇ましく
鐘が鳴る鳴る、かんかんと。

もう起出した小舎小舎(こやごや)の
あたりに高い人の声。
霧に包まれ、あちこちに、
動く羊の幾群(いくむれ)の
鈴が鳴る鳴る、りんりんと。
今さし昇る日の影に
夢からさめた森や山。
あかい光に染められた

12 11

紅葉(もみじ)

作詞 高野辰之
作曲 岡野貞一

秋の夕日に照る山紅葉(もみじ)、
濃いも薄いも数ある中に、
松をいろいろ楓(かえでや蔦(つた)は、
山のふもとの裾模様。

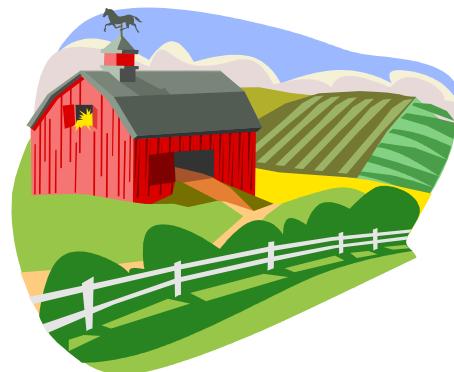
渓(たに)の流に散り浮く紅葉、
波にゆられて離れて寄つて、
赤や黄色の色様々に、
水の上にも織る錦。



クリップアート：「秋」で検索



クリップアート：「秋」で検索



クリップアート：「牧場」で検索

※昭和7年12月発行の「新訂尋常小学唱歌(四)」に
掲載されました。作曲の船橋先生は東京音大の教授
であったそうです。作詞の杉村楚人冠さんは当時
朝日新聞の記者だったそうで、明治43年に岩瀬牧場
に取材に行つた際に詩をお作りになつたそうです。

故郷(ふるさと)

作詞 高野辰之
作曲 岡野貞一

兎追いしかの山、
小鮒釣りしかの川、
夢は今もめぐりて、
忘れがたき故郷。

如何にいます父母、
恙なしや友がき、
雨に風につけとも、
思いいづる故郷。

こうぞしをはたして、
いつの日にか帰らん、
山はあおき故郷。
水は清き故郷。

14 13

お正月

作詞 東くめ
作曲 瀧廉太郎

もういくつねるとお正月

お正月には凧あげて

こまをまわして遊びましよう

はやく来い来いお正月

もういくつねるとお正月

お正月にはまりついて

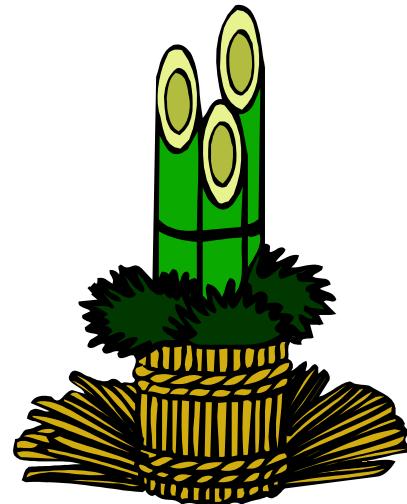
おいばねついて遊びましよう

はやく来い来いお正月

明治34年7月に共益商社書店が発行した「幼稚園唱
歌」に掲載されました。



クリップアート：「羽子板」で検索



クリップアート：「正月」で検索



クリップアート：「風景」で検索

※大正3年6月16日発行の「尋常小学唱歌 第六学年用」に掲載されました。岡野高野の名コンビによる名曲でござります。おふたりの故郷にはそれぞれ「故郷」の歌碑が建てられているそうです。

一月 一日

作詞 千家 尊福
作曲 上 真行

年の始めの例(ためし)とて、
終なき世のめでたさを、
松竹たてて 門(かど)ごとに
祝(いわ)う今日こそ 楽しけれ。

初日のひかり さしいでて、
四方(よも)に輝く今朝のそら、
君がみかげに 比(たぐ)えつつ
仰ぎ見るこそ 尊とけれ。

※明治 26 年 8 月 12 日、文部省告示第三号として、
祝日大祭日歌詞並(ならびに楽譜) というのが官
報に掲載、公布されました。掲載されたのは 君が代、
勅語奉答、二月一日、元始祭、紀元節、神
嘗祭、天長節、新嘗祭 で、後に制定された 明

16 15

冬の夜

作詞 不詳
作曲 不詳

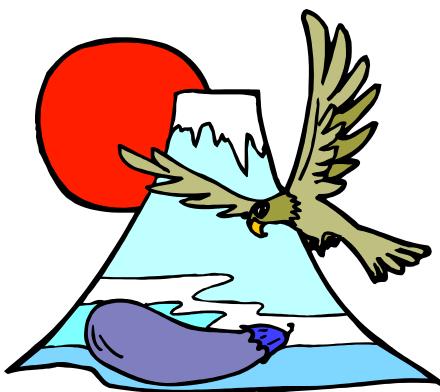
燈火ちかく衣縫う母は
春の遊びの楽しさ語る
居並ぶ子どもは指を折りつつ
日数かぞえて喜び勇む
囲炉裏火はとろとろ
外は吹雪

囲炉裏のはたに縄なう父は
過ぎしいくさの手柄を語る
居並ぶ子どもはねむさ忘れて
耳を傾けこぶしを握る
囲炉裏火はとろとろ
外は吹雪



クリップアート：「winter」で検索

※明治 45 年発行の「尋常小学唱歌」第三学年用に掲
載されていました。



クリップアート：「正月」で検索

治節」を加えて、儀式唱歌」と呼ばれています。太平
洋戦争終結まで、50 年以上も学校で歌わ(さ)れて
いたわけです。この中で、こんにちまで歌い継がれ
ているのは 君が代 と、この「二月一日」だけで
すね。

どこかで春が

作詞 百田 宗治
作曲 草川 信

※大正12年3月、「小学男生」で詩が発表されました。

どこかで春」が
生れる、
どこかで水が
ながれ出す。

どこかで雲雀が
啼いている、
どこかで芽の出る
音がする。

山の三月
東風吹いて
どこかで「春」が
うまれてる

18 17

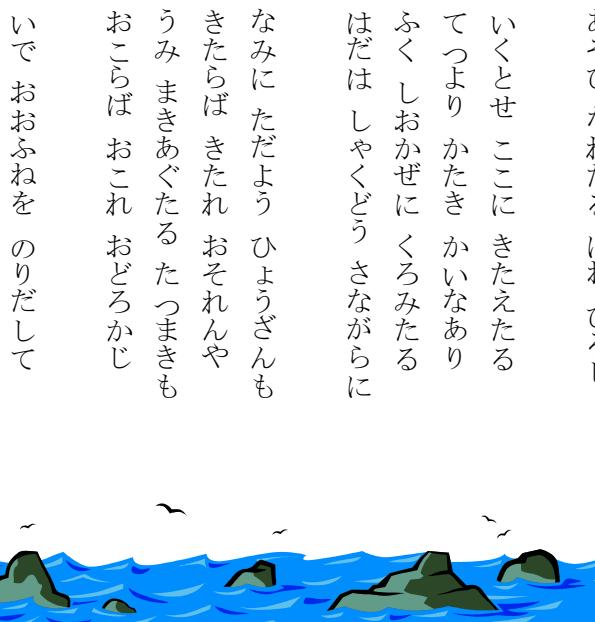
我は海の子

作詞 文部省唱歌
作曲 文部省唱歌

われはうみのこしらなみの
さわぐいそべのまつばらに
けむりたなびくとまやこそ
わがなつかしきすみかなれ

うまれてしおにゆあみして
なみをこもりのうたときき
せんりよせくるうみのきを
すいてわらべとなりにけり

たかくはなつくいそのかに
ふだんのはなのかおりあり
なぎさのまつにふくかぜを
いみじきがくとわれはきく



クリップアート：「sea」で検索

いでおおふねをのりだして
われはひろわんうみのとみ
いでぐんかんにのりくみて
われはまもらんうみのくに



クリップアート：「spring」で検索

恋はやさし野辺の花よ

訳詞 小林 愛雄
作曲 フランツ・ツッペ

恋はやさし 野辺の花よ

夏の日のもとに 桄ちぬ花よ

熱い思いを 胸にこめて

疑いの霜を 冬にもおかせぬ

わが心の ただひとりよ

胸にまことの 露がなれりや
恋はすぐしぶむ 花のさだめ
熱い思いを 胸にこめて
疑いの霜を 冬にもおかせぬ
わが心の ただひとりよ

※スッペ(1819-1895)はウイーンで活躍した作曲家で、たくさんのオペレッタを残しています。中でも自ら最高傑作という「ボッカチオ」は、1879年に初

20 19

宵待草

作詞 竹久 夢二
作曲 多忠亮

待てど暮らせど 来ぬ人を
宵待草の やるせなさ

今宵は月も 出ぬそくな

暮れて河原に 星一つ

宵待草の 花が散る

更けては風も 泣くそな



クリップアート：「grass」で検索

んで、バイオリニストだったそうです。また、夢二が作ったのは1番だけで、2番は後に西条八十が加えたものだそうです。



クリップアート：「flower」で検索

演され、日本でも翻訳上演されて人気を博したそうです。恋はやさし野辺の花よ」は、この劇中歌でございまして、もともとはソプラノのようですが、田谷力三さんや榎本健一さんもお歌いになっています。

※竹久夢二は明治17年岡山県生まれ。大正時代に活躍した画家・詩人でございます。大正3年、日本橋にキャラクターショップ「港屋 絵草子店」を開き、その絵が全国の女学生に大人気を博したそうです。「宵待草」は夢二の代表作と言われている歌で、大正7年に楽譜が発売されるや、これまた大流行した模様です。作曲は、多忠亮（おおの ただすけ）さ